文化財センター通信
【かざぐるま】

風車 2

平成13年11月1日発行

〒640－8268　和歌山県和歌山市広道20番地
発行：財団法人　**和歌山県文化財センター**
Tel：073(433)3843　Fax：073(425)4595

■ 南部小学校の先生と児童に熱心に説明する土井主任

主な内容

通信その１：地域の子供たちとのふれあい－南部町徳蔵地区遺跡から－
通信その２：第２回南部荘遺跡調査委員会開催される
コラム・考古学の散歩道
祈りの原型
－縄文時代の石棒－
粉河寺大門の修理工事
お知らせとご案内

通信その１　地域の子供たちとのふれあい―南部町徳蔵地区遺跡から―

黒石　哲夫

10月4日・木曜日、快晴の空の下、南部町北道の南部小学校の６年生73人が当センターの徳蔵地区遺跡発掘現場に総合学習の一環として見学に訪れました。事前に弥生時代や縄文時代の勉強をした上で、教科書や本などでわからない生の郷土の歴史を再発見しようと、大昔の地面に降り立ちました。

現場を担当している土井孝之主任と藤村瑞穂専門調査員が、現在調査中である徳蔵地区遺跡の縄文時代の河川跡や室町時代の高田土居城跡の堀跡などをわかりやすく説明しました。

現場では、縄文時代の土器や石器に直接ふれたり、当時の食料であった、アワやヒエをみてもらいました。子供たちの熱心なまなざしを受け、土井主任も粘土で土器作りを実演したり、身振り手振りをまじえて、一生懸命に説明しました。

その後、児童たちは今回の体験学習の成果をいろいろなテーマでグループごとにまとめて、教室の壁に張り出しました。

土井主任は「生徒さんたちは話を集中して聞いてくれました。発掘現場体験を上手にまとめてくれて涙がでるほど嬉しい。この中からひとりでも歴史に興味をもってくれればいいと思う。これから家庭や地域などにもこのような動きが広がってくれればありがたい。」と語っていました。

当センターでは地域に密着した文化財の普及活動をおこなっております。発掘調査現場や歴史的建造物保存修理現場では一般の方々や児童・生徒さんの見学を受け入れております。ぜひ、みなさまも一度われわれの現場に足をお運びください。

■体験学習の成果をまとめた南部小学校の6年生たち

通信その2　第2回　南部荘遺跡調査委員会開催される

渋谷　高秀

紀南の海と山にかこまれた南部郷は、南高梅や良好な炭である備長炭の産地として、またアカウミガメの産卵地である美しい千里ケ浜などで全国的に有名な地域です。条里型地割(109m 四方)が良好に残る八丁田圃や高野山に残る200点余りの平安時代から室町時代にかけての当地の様子が記された文書、本荘・新荘・吉田など開発過程を示す地名、鎌倉時代の地頭代官の名を刻んだ石造物など、全国の中世史研究者の間では、「標本的な中世の面影を残す荘園」として有名な地域です。

この南部郷に高速道路の紀南延長に伴い、平成15年完成予定の南部インターチェンジ(仮称)が南部町・南部川村間につくられることになりました。その完成に合わせるように、国道424号線や県道上富田南部線など周辺道路の整備、古川・古川支線改修など河川改修工事、南部平野ほ場整備事業など一大事業が短期間に集中して行われます。南部平野で実施されるこれら開発事業に伴い、埋蔵文化財調査も平成9年度より行われ、本年から来年度にかけて、最も多くの遺跡群を調査します。

南部平野での大規模な発掘調査を総合的に検討するため、平成13年10月24日（水曜日)、南部町で調査委員会（工楽善通委員長・小山靖憲副委員長）を開催しました。

委員会では、センターの各担当者から徳蔵地区遺跡・高田土居城跡両遺跡と南部平野ほ場整備試掘調査に関しての報告があり、海津一朗和歌山

■高田土井城館跡の外堀を視察中の調査委員

大学助教授の文献調査報告、綿貫友子大阪教育大学助教授の南部荘をめぐる海運史料についての報告を受けました。多くの問題点が指摘され、今後の調査方針などが話し合われました。また、現在調査中の高田土居城跡の調査を視察しました。

城館としての全容は、幅10mの内堀で囲まれた東西70m・南北50mの長方形の内郭と北辺・東辺北半分の発掘調査成果と現存地割から推定される東西150m・南北225mの外郭から形成され、全国でも、屈指の規模を誇る平地城館と考えられます。高田土居城館では、堀の変遷からみる城館形成過程や水利機能が明らかになり、従来の中世城館のイメージを一新する重要な遺跡であるとの見解で委員会は一致しました。

コラム・考古学の散歩道

祈りの原型－縄文時代の石棒－

立岡 和人

みなさん、この石は何にみえますか？棍棒のような武器、磨り棒、それとも杖？難しく考えないで、見たそのままのイメージで答えてください。そう、そのものずばり、男性器を模した縄文時代の石の道具で、石棒（せきぼう）と呼ばれています。全体を丁寧に磨いて仕上げています。

石棒は縄文時代に東日本を中心に分布し、和歌山県でも10数点発見されてきましたが、近年の日高郡南部町・南部川村に所在する徳蔵地区遺跡の発掘調査で、いっきに５本見つかりました。一緒に出てきた土器等から、今から二千数百年前の、縄文時代の終わりから弥生時代の初めのものであることがわかりました。

その使い方については、はっきりとは判りませんが、【多くの場合、亀頭部を表現した男性器そのものを表現していることから、男性神の依代（よりしろ）としての意味が付加されているという。そこでは、男性にほぼ限定された祭りが男を中心に行われた。男性に関わる祭りとは生殖行為にはじまり、成年式を経た男の世界への仲間入り、狩猟や漁撈といった男性世界にかかわる生業活動に類することが考えられる。『縄文時代研究辞典』東京堂出版1994】というようなことが、研究の成果として述べられています。

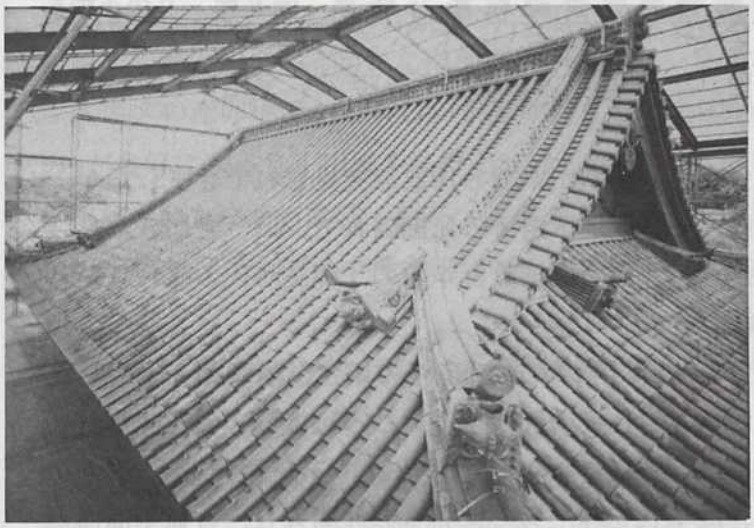
縄文時代晩期から弥生時代初頭という時期は、明治維新と比べられるほどの、日本の歴史の上で、大きな変革期でもありました。このような激動の時代に、大昔のひとびとは、石棒を用いた祭りを何回も行うことにより、明日への望みを託したのでしょうか？想像は膨らんでいきます。

■ 徳蔵地区遺跡出土の石棒

重要文化財　粉河寺大門の修理工事

鳴海　祥博

■ 屋根降り棟の棟積みの状況



■ 屋根本瓦葺きの完成

那賀郡粉河町にある粉河寺大門は、宝永４年（1707）の建立より約300年を経過し、傷みも目立ってきたことから、平成１０年１０月より解体修理工事が行われてきました。現在では大門本体の工事がほぼ完了し、年末には仮設足場も取り払います。

今秋の主な仕事は、屋根本瓦葺き工事でした。大門に使用されている瓦は約１万5,000枚に上りますが、このうち約１万枚は古い瓦を再用し、5,000枚は宝永４年当時の形式に倣って新たに製作しました。

本瓦葺き工事は、基本的に１人の葺師と数人の手元（手伝い）というごく少人数の組み合わせによって行われます。材料の選別や運搬は手元も手伝いますが、実際の瓦葺きは、葺師がほとんど１人で行います。また作業の段取りも、葺師の重要な仕事です。こうした作業形態は、屋根が小さくても大きくても同様です。大変な重労働です。

お　知　ら　せ　と　ご　案　内

全国各地の発掘調査報告書の公開と閲覧

当センターは、公益法人として、県内各地で埋蔵文化財の調査・研究をしております。最近でも南部町において西日本で初めての大規模な縄文時代中期の集落などを調査し、現在も続行中です。

当センターでは、郷土史を勉強したい方、全国の有名な遺跡をより詳しく知りたい方などに発掘調査の報告書を公開することにより、広く活用されることを願っております。

①閲覧方法　事前に閲覧を希望する日時を連絡して下さい。
（日時については、都合により変更をお願いする場合があります。）

②連絡及び閲覧場所　和歌山県文化財センター岩橋整理事務所　和歌山市岩橋１２５５
電話　０７３－４７１－６７５８

③閲覧日及び時間　閲覧日／月～金曜日（祝日、年末年始を除く）
時　間／10：00～16：30（ただし、11：45～13：00は閉鎖）

シンボルマークの募集

”文化の風をおこす”という願いを込め、「風車」と命名しました。「風車」に似合うシンボルマークを募集中です。ぜひ奮ってご応募下さい。

応募先　〒640－8268　和歌山県和歌山市広道20番地

〈編集後記〉現場に行くのも暖かい服装が必要となってきました。見学の際も防寒スタイルで。